

審査員メッセージ

【エッセイ部門】

各地からたくさんの素晴らしい作品を寄せていただいたことに、まずは感謝申し上げます。テーマにある「古き良き博多、そして未来へ」の通り、博多が歴史や思い出を大切に残す場所である事を望みつつも、未来に対する期待が力強く、そして創造力豊かに語られる作品が多く、印象に残った。同時に、博多に集う者の一人として、博多のまちがこんなにも愛されるまちである事を実感し、博多のまちづくりに取組む決意を新たにしました貴重な機会でもあった。

(博多まちづくり推進協議会会長 唐池恒二)

人が年を重ねていくと同じように、町が年を重ねていくことも、たくさんの想いと経験が積み重ねられることだと、応募されたたくさんのエッセイを読み進めるほどに実感した。私が初めて博多に着いてから20年が経とうとしているので、ようやく博多っ子として成人したことになるが、それよりもはるか以前から、多くの人々の想いが重ねられた博多の町が、これからも良き『博多』でありつづけることを、博多を愛するひとりのファンとして見続けたいと思う。博多弁の響き、博多っ子の人柄は、初めての人にとっては興味深く、そして慣れれば慣れるほどハマる不思議な魅力に溢れている。日本にありながらにして、アジアの一都市としての魅力も兼ね備える博多が、今後もより多様な人々にとって印象的な町であるよう伝えていきたい。

(月刊情報誌フクオカ・ナウ編集長 ニック・サーズ)

テーマが過去から未来まで、ということでバラエティーに富んだ作品が集まり、楽しく読ませていただきました。豊かな歴史と文化をベースに人が人らしく暮らせる博多にしていこうという全体的な内容とあってよいでしょう。博多生まれ、「博多町家」ふるさと館の館長を勤めさせていただいているわたしとしては嬉しいものもしいかぎりです。

審査に当たっては、具体的で新鮮な提言を基準としましたが、いずれも遜色のない作品ばかりで採点には苦労しました。これからも博多をよろしく願います。

(漫画家、「博多町家」ふるさと館館長 長谷川法世)

【イメージ部門】

イメージ部門の作品の数々を見てみると、どの作品からも古き良き博多を大切にしながら未来へつなげてゆこうという作者の想いが伝わってくる。優秀賞の「博多未来予想図」は、「風の道」というコンセプトのもと、川の流れを活かし、緑を育みながら、山笠という古き良き伝統を受け継ぐ人々が住み続ける継承（流れ）の街を大切にするという、環境問題にも配慮したとてもバランスのよい街づくりの未来像が見えてくる。ほかの作品からも、過去と現在が交錯する街、懐かしさが垣間見える博多の街、守り続けていきたい変わらない風景といったテーマが見受けられ、これからの博多の街づくりのイメージは、両極端なものがお互いの魅力を高めてゆく心地よい混在、といったものが大切なテーマの一つになっていくのではないだろうか。みなさんの作品からそのような想いが強く感じられた。

（写真家 川上信也）

イメージ部門では、写真、イラスト、コラージュなど様々な表現方法での応募をいただき、審査も困難を極めました。結果的には、壮大なまちの鳥瞰イメージを描いた作品を最優秀作品として選出し、個人と博多との関わりの写真群のコラージュ、通りの将来イメージのスケッチ、「承天寺の秋」を写した写真の3点を優秀作品として選出しました。「承天寺の秋」は紅葉の美しさの表現に加え、建造物の開口部を通して見る庭園の向こうに奥深く広がる博多のまちの姿を想像させ、伝統とまちとがつながるイメージを想起させる作品として高く評価されました。他にも多数の力作を作成し、お寄せいただきました応募者の方々の創造力に心より敬意を表したいと思います。

（博多まちづくり推進協議会理事、九州大学教授 出口敦）

最終審査に残った作品はいずれも甲乙つけがたく、得票も拮抗した。

未来のまちを一枚の平面に想い描くことの難しさ、このようなコンペに参加すること自体の大変さを、審査する側も改めて実感した上で、視覚的に見て、文字と画面構成との総合点の高い作品が選ばれた。

最優秀賞は都市の中の「風の道」や水の「流れ」に着目し、心と体で感じるここちよさをデザインしたまちづくりのプラン。さわやかなエコロジカルな街並みが素直なタッチで表現されている。

家族が見た博多のまちの魅力的な断片を丹念にコラージュした重層的な作品、古き良き博多の一面を詩情豊かに見せた映像、人との対話で成長してゆく街並みを予感させる軽快なスケッチなど、第1回にしてそれぞれ手法も味わいも異なる作品がそろったことは、末頼もしい。

参加された多くの方々の貴重なアイデアやプランを整理・再構成して博多のまちのガイドラインにまとめ上げていくのは簡単なことではない。今も残るまちの姿や記憶を大切にしながら、新しい価値観の創造にむかって、「博多のまち物語」を皆がともにつむいでゆかなければならない。

（産業デザイナー 水戸岡 鋭治）